

猿のこしかけ

幸田

新潮社版

猿のこしかけ

定 價 二七〇圓

地方賣價 二八〇圓

昭和三十三年九月五日 印刷
昭和三十三年九月十日 發行

著 者 幸 田 文

發行者 佐 藤 亮 一

東京都新宿區矢來町七一

印刷者 山 田 一 雄

東京都青梅市根ヶ布三八五

發行所 株式會社 新 潮 社

東京都新宿區矢來町七一

電話東京(34) 二七二一
六〇一五

振替 東京 八〇八番



亂丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします

猿のこしかけ

平
つ
た
い
期
間

三十もなかば過ぎ、ある意味ではいちばん女がしやん／＼してゐようといふ年齢のとき、私は平つたくなつてゐた。離婚して癪つきで歸つて來たのだから、平つたくならざるを得ないのだつた。もつともそれは自分が自分で平つたく平伏してゐたつもりなのであつて、ひとが私を見れば平伏なんぞとは聞いて惘れると云ふかもしれないのである。自分では随分べたんこになつてゐた期間だとおもふ、離婚から戦争までは。——とき／＼思つて、戦争とはへんなものだなあとふりかへるが、もしあのとき戦争がなかつたらば、私はずつとべたんこを續けて、いまはもう繩の腐つたみたいになつてゐたらうとおもふ。娘をやりこめる甲斐性も、お手傳ひさんに文句を云ふ土性骨も失つてゐたらうと思ふのである。あの

ときはさういふべたんこになつてゐたのである。いえ、なつてゐたつもりだつた。それが戦争がはじまつて、男はいちどにますらをになつたし、女も揃つてますらになつてしまつたので、自然べたんこが起きあがつてしまつた。出戻りでも平伏はいらなくなつたといふ感じは、私はいまに忘れられない。しかも平伏からそろ／＼起きあがり伸びあがりしてみても、どこからも咎められなくて、誰も彼もみんなあつちのはうへ眼を向けてゐて、私の起きあがりなんか、あゝありがたい誰も見ちやあゐないんだ、といった状態だつた。あの感じを私は忘れられない。誰もそんなことを云ふ人はゐないのはさみしい、私の離婚はそれほど罪ふかいものだつたかと思へて。私は私とおなじやうに、戦争でべたんこな平伏から赦された女がゐないはずはないと思つてゐる。

でも、その平伏期間がずつといつてんばりに平伏のみであつた、といふのでもない。平伏ながらにこちや／＼と多少動きまはりもさせられた。だいたい私の父親は、「おれの子供のころには、立つてゐるものは親でも使へ、遊んでゐるものには遠慮はいらないといふ一般の調子だつたから、それに文句は云へなかつた」といふ育ちかたが浸みてゐた。ましてや

出戻りで手が明いてゐる娘を同居させてゐるとすれば、氣にならないわけではない。それに、ぼんやりさせておいてはといふ親心があつたことはもちろんだつた。

「おまへたち親子はなんとも食はせてやれるから、たゞ金を取るつもりだけで働きになど出ないでくれ。それより何かしてみないか。博物館へ毎日辨當持ちで行つてみてはどうか」と云つた。博物館通ひは十六七の小娘のときにも一度すゝめられたことがあつて、いやだつた記憶がある。それで、男親なんてものは二十年たつても、おなしことを云つてゐるのだとしか考へず、博物館の勉強をしようなどとはまるで氣が動かなかつた。むしろ禁じられてゐる小遣取りのはうへ心がかたよつてゐるが、そこが平伏なのだ、云ひだせない。するとある日、急いでゐるやうすで書齋から出て來て、「おまへちよいと役に立つてくれないか」と云ふ。

「何をやるんですか。」

「覗いて來るんだ、ざつとでいい。」

「……………」

「どこでもいゝんだ。そこいらへ行つてお茶の先生の看板を見たらはひつて行くんだ。もちろんその主人に迷惑がかゝらないやうに氣をつけるんだ。そしてそこで南坊録をどういふやうにして教へてゐるか、そいつを覗いて來てもらひたいんだ。」

「だつてそれぢや入門するんですか。」

「そんなことごとく云つてなくてもいゝんだよ。女はなんか一ツ頼むと、きまつてごたつくからだめなんだ。おれが役に立つてくれと云つて頼んでゐるんだし、おまへに役に立つ氣があるなら、すらりとやればいいゝぢやないか。いやならいやと云へば誰かほかの人間に頼むんだ。なんでもないことぢやないか、たゞ南坊録をどうやつて扱つてるか覗いて來てくれといふだけのことなのに。入門のなんのと、行きもしないうちになぜさう自分で合點しなけりやいけないんだらうな。おまへの合點の通りに運ぶかつていふんだ。遊んでるひまに行つて來い行つて來い。」

ぺたんこを感じながら、出かけて行くしくを今すぐするはうが賢いと思ふのである。

第一、どつちを向いて行つていゝかわからない。第二に入門はその場のなりゆき任せにし

たにしる、絶對その主人に迷惑をかけない、とはどうすればいいか。何が迷惑で何が迷惑でないのか、私に範圍は皆目見當がつかなかった。第三に南坊録とはどんなものか知らないのである。女學校時代から南坊録がお茶のはうの虎の巻的な本だといふことは、どこかで聞き齧つて名だけは知つてゐたが、そんなもの讀んだことはない。父と大工の棟梁が、かねわりのとうかで南坊録がどうかと、二人で興に乗つてゐたのを知つてゐるきりである。それが私の全知識なのでは、何を覗いて來るのか困るのである。第四にあれほど、ものを訊くには名のつておじぎをしろと云つて聞かせてゐるくせに、なぜ拙者露伴と申すもの、お教へに預かりたく罷越しましたと云つて出て行かないのか、それと「覗くと迷惑」とがどう關係をもつのか、そのへんははなはだよくわからないあぶなさがあると思へた。

私だとして三十五過ぎ四十手前といふ年輩で、子供の使ひのやうに「ついうつかり」では濟ませないのだつた。けれどもそんなことを云つてゐれば、ごたつくな、すらりとやれと來る。さうなるといつも私は一ツしか行きかたはない。まゝよ、なのだ。「行つてはみますが、けふ行つてけふ覗いて、よくも悪くもそれきりでおしまひにするんですか。それと

も、けふだめならあすあさつてと續けるんですか。」

「おまへの器量次第でしかたがあるまい。」

それで少しゆとりができた。實は少し心あてを思ひだしてゐた。連れになつてもらふ人があつた。そのひとは生活にさういふ趣味も必要もあつたのかとおもふ、習ひに行きたい、一緒にどうだと洩らしてゐたのをこちらは遠々しく聞いてゐたが、いまは思ひだしてそれが頼りになつた。そのひとの都合を訊いたりしてまご／＼二三日を過ぎてゐると、父は不機嫌で、「弱いやつは一人ぢや歩けないんだ」と輕蔑された。

それでもだん／＼話を訊きだしてみると、へんなぼろを吐いた。もと／＼この家は茶坊主が職業なのださうだが、父はぶく／＼のお手前などしなかつたらしく、誰かに茶も知らないのかと云はれて恥を搔いた、それが北海道へ行くまへと聞いたから十九歳以前のことになる。それでいまさら家の人に訊くのも業腹だし、弟子入りをして習ふほどの氣も金も時間もない。そのころは道場荒しがはやつてゐて、それに倣つたといふ。看板のかゝつてゐる以上表藝なのだから、亭主もそのくらゐの覺悟はしてゐるはずだといふ考へのもとに、

「御免」と訪つて「一服頂戴」と申入れるのださうだ。ところが父の當つたうちは、「御免」と云つても人が出て來ない。しまひにおよそ見込に違つた見すばらしいばあさんがちよいと顔だけ出して、「明いてをりますものを」と云つた。覺悟のほどは現はれてゐるのである。しかしなんでもなく平手前で一服くれた。が、手前のあひだぢゆう、書生さんもおなかがおすきならお湯漬一ツさしあげようかと云はれやしないかと思つて、いやな氣をさせられたといふ。私はそれを聴きながら、父が今日の時勢のなかで敢て私にそれを試みさせようとしてゐるのぢやないかと氣づいた。だからなほのこと、まゝよになる。まゝよはある元氣をもたせる。

かりにも道場荒しの傾きがある以上、その構へをまづぐるつとまはつた。板塀で圍つて相當ひろい建物である。冠木門。門から自然石を敷いて兩側が植込、玄關は見えない。私の合棒は茶目氣のある人で、玄關がむきだしでないのを見てとると、十分おちついて觀察をしてゐる。その眼を追つたら、ちゃんと金目の庭木を拾つてゐる。これはたまらないと思つて私も反對側をずらずらつと見て行つて、半年、すくなくもこの春には植木屋を怠つ

てゐると踏んだ。彼女のはうは梅と柳をつなぐ大きな蜘蛛の巣を見てゐた。それから玄關へ行つた。「頼まう」以下のすべてを彼女に押しつけて私はあとに退り、鼻だけをもちあげて嗅ぎとらうとした。玄關には茶の湯のけぶりも、道場教場の匂ひもなくて、たゞ花やかな女衣裳のいろどりのやうなものが感じられた。

これなら大丈夫さうだとやゝ安心して履物を脱いで、とたんにちんと固くなつた。脱いだ履物の始末をどうやつていゝか知らないのだし、履物を始末する作法があるといふことは小耳に聽いてゐる。まるで知らなさとし小耳に知つてゐるのとのあひだに挟めて、心身の自由を縛つてくるところは道場の威嚴である。それでもあがつた以上は一服頂戴もしないで立往生といふわけには行かない。「道場へも通らず玄關で一人勝負に眼をまはして倒れた」では、うちへ歸つてどんなぶつた斬られかたをするか、それはしばし承知のことである。三日ぐらゐ死んでゐなくては生きかへれないのである。稽古は幾部屋にも分れて古參新參の順があり、初心の部屋に入れられた。女衣裳の色彩が部屋を鍵に圍んで盛りこぼれ、でもさすがに芝居や音樂會のけばだちはない。ない、と大ざつぱなことしか掴め

ないほどのぼせてゐる道場荒しは、歩くにもどちの足からどこを通つていゝのだから、すわるにもどうどこへすわつていゝのか、まったく進退の自由を缺いてゐた。せめて、こゝにゐならば人たちは誰ひとりとして、私が親の言ひつけで覗きに來てゐるとは知つちやらないのだ、と思ふことでやつと支へられて。——合棒だつて、道場ひやかしとは以心傳心通じてゐても、南坊録覗きと知つてはゐなかつた。

ずるぶん長くすわつてゐた。主婦はこんなに長い時間ひとところにも起ちもせずゐられるものではない。半日留守にしてゐるうち、臺所はどうなつてゐるかなと思ふ。本性はおそろしいもので、さういふことを考へるとたちまち正念がかへつてきて、私はすぐ先生の裾を眼に入れた。もつともそれはおそらく私のみならず、ゐあはせた人みなが見てゐるにちがひないことだつた。衣がへをしたばかりの折からだのに、下著の裾ははなはだしくあいまいな色づきかたをした白なのであつた。初歩の人につける稽古は面倒なのだから、受持の先生はいづれはこの一門のなかの師範格であらう。これだけ大勢の弟子にあまりの起つたりゐたり、連日のことではひまもなくてと云はれゝば同情するが、それにしても臺

所女 of 感覺はあいまいな白をゆるさないのである。

やがてひるになつた。お辨當がひらかれると、衣裳のいろどりは一變して遊山的雰圍氣を醸した。そつと訊く。「どのくらゐお通ひなさいまして。」

「まだ一年ですの。」

「お講義はどんなことを。」

「え？ お講義つて？　なんでせうお講義つて。」

「南坊録なんかのお話ありませんの？」

「おほゝ、ほゝ。それなんのお話？」

私と私を特派した父とはこの令嬢から無手勝流でうつちやられたにひとしい。なんだか知らないが愉快だつた。まだ折目のついてゐない眞新しく赤い袷紗と小さいお扇子を父の前にならべると、途々考へて來たとほりにちゃんと芝居を打つ氣に畏つて、あの令嬢のした通りに「おほゝ、ほゝ」と笑つた。

待つてゐたことの明らかな父はつられて、わけを知らないなりに上機嫌に笑つた。「ど

うした？」

「南坊録は、あの字もない。試合は負けたこともたしか、勝ったこともたしか。」

その場はそれで笑ひ話に終つたが、翌日父は又、もつとほかへ行つて来てくれと云ふ。再度の話となると、これは是非にか父のしごとに必要なが生じてゐると考へさせられる。するとやはり親子の、それも離婚といふ泣きを見せたあとの老父へ、なんとか償ひもしたい情が起きた。一度すれば一度だけの足しにはなるもので、今度は大ぶゆつたりして、でもまた同行二人で出かけて行つた。

廣い式臺の構へだつた。時間外だと見えて、内弟子ではないまつたくの臺所人が取次に出た。それがひつこんで、ふとつた老婦人が氣取りけもなくゆらつと出て來ると、もうそこへすわつて兩手をぴたりと突いてゐた。一瞬おくれて、老衰と肥滿を感じさせない輕さですわつたのだとわかつた。大丈夫にすわつてゐる——といったかたちだつた。かりそめに門を叩いたものにも快く迎へてゐる度量が測られた。こちら二人はこも／＼適當に挨拶をした。